

遠藤周作論：「救い」の様相

池田， 静香

<https://hdl.handle.net/2324/7182259>

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（学術）, 論文博士
バージョン：
権利関係：



氏 名 : 池田 静香

論文名 : 遠藤周作論―「救い」の様相

区 分 : 乙

論文内容の要旨

本論の目的は、キリスト教徒である戦後作家遠藤周作の作品を対象とし、その作品世界に表れた「救い」の様相を、特に第二次世界大戦を背景とした場合について明らかにすることにある。

本論の構成は、「序章」、「第一章 第二次世界大戦との対峙―マルキ・ド・サドとコルベ神父」、「第二章 日本を作品舞台とした第二次世界大戦との対峙」、「第三章 「母なる神」再考」、「第四章 遠藤作品の受容」、「終章」から成る。

序章では、遠藤研究がおかれている現状と本論の位置を確認した。作家の自作解説に寄り添うよう読み進められてきた遠藤作品とその作品研究は、現在、研究のあり方そのものを相対化する必要があるとされている。この試みは、遠藤作品の受容が第二ヴァティカン公会議の精神が日本に普及する変化のなかでどのように変化したのかを明らかにすることや、傍流とされてきた作品を研究対象とすること、遠藤が創作にあたって使用した参考諸書との関係を精査する典拠研究などを中心に深められてきている。また、一九九六年に遠藤が没して以降、日記や書簡、蔵書の書き込み、原稿などの新出資料が継続的に発掘、公開され、作家の生前の発言を新たな目線で眺めうる参照点を得やすい状況が整えられつつある。こうした研究史の流れに沿い、本論は二〇一一年に公開された未発表草稿「われら此処より遠きものへ」の分析を出発点とすることで、弱者に寄り添う「母なる神」を描く遠藤作品の「救い」を相対化することを目指し、以下の各論を立て分析することを概説した。

第一章は、未発表の小説草稿「われら此処より遠きものへ」の分析を中心とする。草稿は、遠藤の小説家修行となったフランス留学中(一九五〇～一九五三)のマルキ・ド・サド研究を、第二次世界大戦という状況を取り込みながら活かそうとしたものである。執筆時期は、第一小説「アデンまで」(『三田文学』一九五四・一一)の前となる一九五三年である。これまで、留学中のサド研究は、キリスト教の枠内においてのみ有効なため、西洋人のみを描いた「白い人」(『近代文学』一九五五・五、六)として結実したとされてきた。第一節第二節では、留学期の日記やエッセイなどと比較検討し、その創作意図を考察した。その結果、草稿「われら」におけるサド研究には、西洋と日本の距離を棚上げにした状態ながら、汎神的世界の中での「救済」を模索していた可能性があることを指摘した。また、遠藤のサド受容は、「サド伝」(『文学界』一九五九・九、一〇)や「爾も、また」(『文学界』一九六四・二～一九六五・二)を中心に議論され、サドを媒介としてでは西洋との距離感を埋める事ができなかったとみなされてきたが、草稿「われら」にはそうした見方に修正を迫る要素があることを指摘した。なお、本草稿のサドは、第二次世界大戦によって「狂女」となった女性を救う力を持つ存在としてみなされている。この点を引き継ぎ、第三節では、サドへの期待とは反対の方向から第二次世界大戦下の「救い」を見せた、コルベ神父が体現する「救い」のあり方を考察した。遠藤は二度、アウシュヴィツ収容所で身代わりとなって死んだコルベ神父をモデルとした小説を書いている。その『死海のほとり』(新潮社、一九七三・六)と『女の一生 二部』(朝日新聞社、一九八二・三)における神父の描かれ方の相違を確認した。その結果、「われら」でサドを描きつつ第二次世界大戦の「悪」への「救い」を描けなかったのと同様、コルベ神父の身代わりの愛という聖なる

行為によっても、現実的な「救い」を描くことは難しかったことを指摘した。

第二章は、フランス留学時にサドに興味を抱いた根幹にある、第二次世界大戦がみせた「悪」への「救い」について、日本を舞台とした作品をとおして考察した。第一節では、サドの自然観を「悪」の表象として取り入れたとされる『火山』（『文学界』一九五九・一～一〇）を分析した。『火山』の赤岳とモデルとなった桜島との比較を通し、西洋との対立を描いたといわれてきた『火山』には、西洋との距離感を超え、サドを通じて目指したキリスト教福音前の世界を描いた可能性があることを指摘した。なお、この指摘は、福音前、つまり救済される前の世界を描くことを指す。そのため、『火山』には「救い」を求める嘆きが描かれるに留まる。第二節では、第二次大戦末期に起きた米軍捕虜の生体解剖実験を描いた「海と毒薬」（『文学界』一九五七・六、八、一〇）を考察し、キリスト教を日本的に変容した「母なる神」とは異なる、普遍的な「救い」が求められていることを明らかにした。第三節では、戦時下の日本で拷問を受けた神父を描いた、「幼なじみたち」（『野性時代』一九七七・五）を考察した。まず、戦後、自身を拷問した日本人のいる世界で生きることを選択し、恨み言一つ言わなかったという神父の内面は、外部からしか描かれていないことを確認した。『沈黙』をはじめとする遠藤文学の主要テーマは「許すことの大切さ＝母なる神」だが、その観点では、神父の心情を説明できない表現があることを指摘した。そのうえで、他者としての子供を描いた「白い風船」（『朝日新聞』一九六九・一・一）との比較から、たどり着けない内面を有する他者を尊重することの重要性が描かれていることを、指摘した。

第三章は、遠藤作品の主要テーマとなる『沈黙』（新潮社、一九六六・三）で示した「母なる神」について、第二次世界大戦に目配せしながら「救い」のあり方を検討した。第一節では『沈黙』執筆のスタートラインに戦時中の弱者としての経験があったという回想に着目し、『沈黙』への船出と目され踏み絵も登場する「満潮の時刻」（『潮』一九六五・一～一二）との比較を行った。「満潮の時刻」には病室における死に際し、苦しみに共感する「母なる神」が描かれている。本作の中心的な「救い」は、病に倒れた者の孤独を和らげる点にある。だが、作中、死を意識する入院患者は、自身の死と第二次大戦下に戦死した人々の死を重ね合わせて意識している。この点を重視し、『沈黙』との比較を試みた。その結果、戦場での死に『沈黙』と同じような「救い」を見出すことは難しいことを確認し、「母なる神」の限界を指摘した。続く第二節では、『沈黙』で打ち出した棄教を許す「母なる神」のあり方を、その後の遠藤作品との比較から検証した。なぜなら、『沈黙』発表の際、キリスト教界から棄教を許す神を描いたことで強く非難された応答として、「母なる神」の正当性を今後の創作で証明したいと、遠藤が訴えたからである。遠藤はこの際、日本人の宗教心にある母親への思慕とかくれ切支丹信仰を例に挙げた。そこで、『沈黙』以後深められた、かくれ切支丹研究をまとめた「日本の沼の中で」（『野性時代』一九七九・一～六）から振り返り、評価した。「日本の沼の中で」では、「母」に許しを請うところに留まるかくれ切支丹の信仰は、カトリックの根幹である再起への願いが欠けていると述べられている。この点と同様、『沈黙』以降、「許す」だけではない「厳しさ」が強調された母親像が描かれていくことを指摘した。

第四章では、カトリック新聞・長崎新聞における遠藤周作関連記事の調査を実施することで、遠藤作品の受容を実証的に評価する基盤を整えることを目指した。調査の動機には、作家と関係者の発言から、キリスト教界から強い非難を浴びたとされる遠藤作品の受けとめられ方は、聖職者と一般信者とは異なると考えた遠藤周作文学館での勤務経験があった。カトリック新聞の読者投稿欄からは、『沈黙』発表当時、そして没年に、遠藤作品を好意的に評価する「声」が多く掲載されていることが分かった。また、長崎新聞のベスト・セラー欄からは、東京での売れ行きよりも長くランクインする書籍があることや、没後、文学館の建設地が長崎に決まるまでの間には、県民主催の読書会や映画上映会などが開催されていることが確認された。

終章では、第一章から第四章までの分析をまとめた。また今後の課題として、第一章第三節で行った『女の一生』の考察は、当時の長崎原爆に関する言説状況のなかに位置づける必要があること、第四章でのカトリックの一般信者の作品受容については、今後なるべく早く『沈黙』の同時代を生きた方々へのアンケートやインタビューを実施することによって立体的にする必要があることを述べた。